

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 20 日現在

機関番号：32718

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25282187

研究課題名(和文) 創造的な身体表現活動での共振創出に関する研究-身体的共創から社会的共創へ-

研究課題名(英文) Study on the emergence of co-vibration in an activity of creative embodied expression :From the embodied co-creation to a social co-creation

研究代表者

西 洋子 (NISHI, Hiroko)

東洋英和女学院大学・人間科学部・教授

研究者番号：40190863

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 14,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、東日本大震災の被災地である宮城県石巻市および東松島市において、3年間の期間内に、現地の発達障害児・者とその家族、教育・福祉関係者、一般市民らが参加する60回の共創表現ワークショップを実施した。ワークショップの現場と研究を往還し、「身体的共創から社会的共創へ」という視座から、「手合わせ表現」を主活動とする創造的な身体表現での共振創出を促す活動モデルを開発し、共振創出能の計測手法および共振創出の経験と心理・社会的変容との関連を検討する調査手法を検討した。

研究成果の概要(英文)：In this study, 60 workshops on co-creative expression had been carried out in Ishinomaki and Higashi-Matsushima in Miyagi Prefecture, the cities affected by the Great East Japan Earthquake for the period of 3 years. The workshops involved local children and adults with developmental disabilities as well as their families, education/welfare officials and citizens. Going back and forth between the workshop sites and research, the authors have deliberated on development of activity model that promotes the emergence of co-vibration in creative embodied-expression which mainly incorporates hand improvisation, measuring method for co-vibration creating skills, and research method which determines relevance between experience in co-vibration and physical/social changes from the viewpoint of "from the embodied co-creation into a social co-creation."

研究分野：身体表現論，舞踊学，身体教育学

キーワード：共創 身体表現 被災地 身心の共振

1. 研究開始当初の背景

(1) 共創的な身体表現と共振

研究代表者(西)は、幼稚園や小学校、特別支援学校等でのダンスの授業実践(1988-現在)や精神科入院病棟での統合失調症患者へのダンス療法(1995-2006)、地域社会での年齢や性別、障害の有無を超えたインクルーシブな活動(1997-現在)、博物館での共創的な身体表現活動(2008-2012)など、さまざまな現場で、多様な活動者を対象にした身体表現の実践とその方法の開発および活動者の身体的、心理・社会的変化に関する研究を継続している。西は、これらの実践研究を通して、身体での出会いとつながりから「私たち」の表現が創出する際には、自己と他者との身心がさまざまなレベルで同調する共振創出が大きな鍵となることを質的検討により明らかにした。こうした身体的同調は、市川『身の構造』(1984)や竹内『「出会う」ということ』(2009)、木村『あいだ』(2008)らが論じているが、これらの言説はいずれも現象論的考察にとどまるものであり、そのダイナミクスは具体的な検討手法さえも未だ確立されておらず、したがって科学的根拠を伴う身体的共創の教育の構想や実践は極めて乏しい現状にある。

(2) 共振と「手合わせ表現」

創造的な身体表現において共振創出の可能性が高く、かつ、さまざまな活動者が容易に行えるシンプルな活動として、西は「手合わせ表現」を提唱し、実践の中核に据えてきた。「手合わせ表現」とは、自己と他者とが手を合わせ、身心の能動と受動を交錯させながら即興的に表現を創り合う行為である。人の手は、身体部位の中でも外部世界と親密に関わる豊かな機能を有し、かつ「手心」といった言葉が示すように心がにじみ出る部位でもある。西は、身体表現における共振の発現プロセス研究に際し、この「手合わせ表現」を題材に250名を対象とする主観調査を実施し、身心が共振へと向かう際には一定の段階が漸次的に移行することを、研究分担者である野口(医療経済学・統計学)との共同研究から見出した(西・野口:保育者としての身体的感性を育てる教育,保育学研究43-2,2004.ほか)。さらに近年では、研究分担者である三輪(工学)と共同で、共振創出のダイナミクスを工学的手法で検討する基礎研究に着手し、一軸での計測装置を開発して、手の力と身体各部の位置計測を進め、「手合わせ表現」で創出する手の動きのカオス性や身体全体の動きが手のひらの動きに対して時間的に先行するという身体の二重性の問題を発見し、その成果と課題を継続的に発表している。さらに、長年にわたる実践の経験から、「手合わせ表現」における心身の共振の深化の過程を図1に示す5つのモードに分類し、モーションキャプチャを用いて、その特性を現象的に捉える研究を行った(西,三輪2012)。

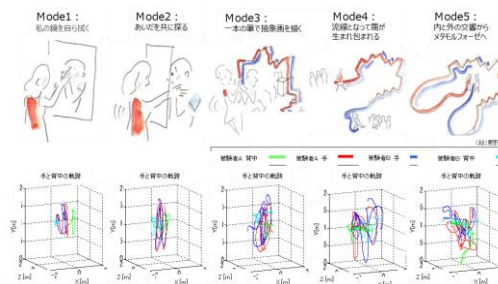


図1.手合わせ表現での共振の深化

(3) 被災地域での「手合わせ表現」のパイロットスタディ

西と三輪は、宮城県の教育・医療関係者との協働を得て、2012年4月より月に1回の割合で石巻市や東松島市等の被災地域の幼児・児童とその家族、児童デイサービスに通う障害児、高齢者支援を行う作業療法士等の医療関係者、ボランティアとして支援を続けている支援者等を対象に、「手合わせ表現」を主活動とする小規模な身体表現ワークショップをパイロットスタディとして継続した。こうした実践研究から、特に言語表現が未成熟な幼児や児童、障害児・者は、保護者が生活再建へと向かう中、被災経験により抱え込んだ感情や日常の情動の自然な表現を抑制する傾向にあることが大きな課題として浮上した。この傾向は、生活上の困難を抱える人々に携わる医療関係者や支援者にも顕著であり、ワークショップでの「手合わせ表現」で他者と表現を創り合う原初的な経験を通じて「本来の自分を表現し他者から受容されて楽になった」「あせっている自分からだに表れていることに気づいた」「変なしながらみや不安が減り、様々な可能性に思いを巡らせた」等、自己の現在の在り方への気づきが促され、地域に生きる多様な他者と未来を共に創り合う根源的な感覚が身心に生成する可能性が強く示唆されたのである。

2. 研究の目的

本研究は、「身体的共創から社会的共創へ」という視座の下、「手合わせ表現」を主活動とする創造的な身体表現での共振創出を促す活動モデル(以下;活動モデル)の開発を進め、これと連動しながら、共振創出能の計測手法と、共振創出の経験と心理・社会的変容との関連を検討する調査手法の確立を目指す。

絆やつながりが殊更に強調される社会状況下において、生命の存在基盤である身体を介して他者との生き生きとした出会いやつながりを実感し、未来に向かって新たな表現を創り合う「身体的共創」の感覚を覚醒させる必要性和その意義は極めて大きい。本研究は、西の長期にわたる共創的な身体表現の実践研究を基盤に、「手合わせ表現」という具体的手法を用いて、共振創出の検討に、舞踊学・工学・医療経済学等が連携して学際的研究を試みる点で、独創性を有している。本研究が、共振創出の計測手法および、その発動

と個人の心理・社会的変容との関連を検討する調査手法の確立を目指し、また、得られた結果を随時参照しながら、開発する活動モデルが「身体的共創から社会的共創へ」の可能性を拓き得るかどうかを検討する、いわば科学的研究と応用的教育方法研究との循環・統合の第一歩である点は、極めて大きな学術的特色である。得られた成果は、今後の被災地復興への身体教育学領域の貢献の一助となり得るとともに、現代社会での身体性の問題、特に他者や社会との豊かな関係性を築くための身体の在り方に関する基礎的知見として、また、開発した活動モデルは、現代社会が抱える身体の課題に応え得る身体教育学の方法論として、大きな社会的意義をもつと考える。

3. 研究の方法

本研究では、パイロットスタディとして実施した被災地域での1年間の身体表現ワークショップの成果と課題を踏まえ、平成25年度から3年間の研究を、以下の(1)～(5)によって進める。あわせて、最終年度には、社会への成果発信として「身体的共創から社会的共創へ」をテーマとするシンポジウムとワークショップ・パフォーマンスを東京で開催する。

(1) 小規模ワークショップの実施

西と三輪が宮城県内で進めたパイロットスタディを引き継ぎ、平成25年度に15名程度での小規模なワークショップ(以下WS)を年間10回(1回の訪問につき2地域で開催)実施する。各回のファシリテータは西と連携研究者(舞踊学)があたる。各研究者はこの小規模WSを通して、計測や調査の事前確認(個人情報取り扱いや安全対策等)を行い、協働する現地コーディネーターとの密な意見交換によって現地の状況やニーズの把握に努める。

(2) 「身体的共創から社会的共創」へと向かう表現活動モデルの開発と実践

(1)の小規模WSでの毎回の成果と課題を確認・整理しながら、共振創出を促す創造的な身体表現の活動モデルの開発研究を進める。平成26年度に本格的に取り組むWSは、地域に生きるさまざまな人々を対象に、継続して参加する30名程度の参加者に対して年間10回のWSとする。開発モデルの達成目標としては、①自己がさまざまな他者と出会いつながり合う身体感覚を獲得すること、②「私たち」の表現を創り合う感覚が共振創出を伴って段階的に醸成されること、③「私たち」の表現を主体的に社会に発信する意欲を培い新たな交流を積極的に創り出すことの3点を掲げる。モデル開発は、西を中心に、舞踊学研究者をメンバーとするモデル開発グループが進める。さらにWSをサポートするために、研究会のホームページを作成し、活動に関する情報や活動事例の動画等を掲載し、遠隔地である被災地域との情報交流を

円滑に行う体制を整える。

(3) 計測手法の検討とポータブル型計測装置の開発

これまでの研究成果(三輪ら)で明らかとなった「手合わせ表現」で創出される手の動きのカオス性や、身体全体の動きが手のひらの動きに時間的に先行する身体の二重性に着目して、共振創出ダイナミクスのモデル化を行う。そのうえで、被災地域での「手合わせ表現」の計測を実現するためのポータブル型共振計測装置の設計と開発に、三輪と連携研究者の板井・渡辺が取り組む

(4) 「手合わせ表現」の計測と共振創出能の評価手法の開発

(3)で得た知見を基にポータブル型の計測装置を完成し、WS参加者30名を対象とする計測を実施する。計測を通して、身体的な感受性や表現の主体性が向上し、身体が開かれていくプロセス(共振創出能)を工学的に計測する手法を開発し、身体的共創の評価指標の確立を目指す。その手始めとして、「手合わせ表現」で創出される、手の動きやそれに先行する身体全体の動きに見られるゆらぎに着目し、ゆらぎの変化と共振創出能の関係を検討する。

(5) 「手合わせ表現」による心理・社会的変容についての検討手法の開発

WSの参加者に対して、野口および連携研究者の前川(臨床心理学)が現地でのインタビュー調査を行い、身体での共振創出の体験による心理・社会的変容を検討する手法の開発を進める。第1段階として、非構造化インタビューによる質的データを収集し、第2段階として半構造化インタビューによる質的データの収集し、双方をM-GTAによって分析し、WSの継続参加による変容の過程を検討する。

4. 研究成果

(1) 小規模ワークショップの実施

平成25年には、石巻市および東松島市において、10回のWSを実施した。参加者は、東松島WSは、石巻支援学校の児童・生徒とその家族、教育・福祉関係者、一般市民と幅広く、石巻WSは、児童福祉サービス「みらい」を利用する発達障害のある児童・生徒と施設職員、保護者等であった。WSの主活動は「手合わせ表現」であり、WSの実施を通して現地との協働体制の基盤を築き、次年度以降の具体的な研究に着手する準備が整った。あわせて、本研究に参画する研究者間で各々の研究を報告し合う研究会「表現未来の会」を東京で発足させ、3回の研究会を実施した。

(2) 「身体的共創から社会的共創」へと向かう表現活動モデルの開発と実践

(2)-1. モデル開発研究と実践の往還

3年間の研究期間内で実施した「手合わせ表現」WSは、東松島市ならびに石巻市、両WSで合計60回であり、毎回の参加者は、東松島WSが30-40名、石巻WSが20-30名で

あった。このうち、2014年8月22日はイオンモール石巻で、2015年8月22日はせんだいメディアテークを会場に、公開・交流WS「てあわせでしあわせ」を開催し、各々100名以上の参加者を得た。

図2は、WSの継続的な実践の中で、自然に形成されたWSの流れである。本WSでは、例えば活動の流れというデザインそのものが、多様な参加者の共創によって形作られていくことが特徴的であるといえ、モデル開発もそのような特徴を活かして進めた。



図2. WSの流れ

活動モデルの開発に際しては、これまでの「手合わせ表現」の実践から現象的に導き出した、活動者の「身心の共振の深化に関する5つのモード」(西, 三輪 2012: 図1)の視点から、西を中心とする舞踊学研究者がWSでの特徴的な表現を事例的に抽出し、モードの移行をファシリテートする要因を検討して、新たなモデルの考案と実践につなげる手法で進めた。以下では、検討事例のひとつを挙げる。

(2) - 2. モード3からモード4へと移行した事例

抽出した事例は、ワークショップに継続的に参加している成人男女(障害のある子どもの保護者等)が第7回ワークショップ(2013.08.22)で行った「てあわせ表現」による即興作品「花は咲く」である。この事例については、映像記録からの検討を行った。即興作品「花は咲く」は、「はじまり」「展開部」「終盤」の概ね3つのパートで構成されている。図3は、各パートの特徴的な部分を、保護者SとファシリテータNとの表現空間内での位置関係およびその箇所を含む写真から捉えたものである。まず、「はじまり」のパートでは、Nが一人一人の保護者と「てあわせ表現」を行い、個々に咲く花によって、徐々に表現世界が築かれていくようであった。演者間で事前の打ち合わせを行なってなくても、ピアノ伴奏者の弾く「花は咲く」からイメージを共有することが容易であった。図3に示す「はじまり」のパートでの保護者SとファシリテータNの位置関係とその軌跡からは、二人が向き合って「てあわせ表現」を行っている箇所(図中の①)だけでなく、一方が他方の外側に空間を開く箇所(②)、一緒にタメをつくる箇所(③)、前後に時差をつけながら空間内を走って移動している箇所(④)等、2者の身体が多様につな

がり合って表現空間を広げ、かつ、タメをつくる静止や速い移動といった表現の時間的な幅が広がっている様子が確認される。これらよりモード3「一本の筆で抽象画を描く」が出現していると考察される。続く「展開部」になると、表現空間内の演者だけでなく、保護者同士が「てあわせ表現」を行いながら作品に次々と自然に加わり、同じ相手と「てあわせ表現」を行うだけではなく、それぞれが空間内を自在に移動しながら、出会った他者と自由につながったり離れたりして、私たちの花の世界を豊かに膨らませていった。図3に示されるSとNとの個別の関係をみても、それまでは、全体として一定の広がりが見られた表現空間(⑤)内の別の位置で、さまざまな他者と表現を行っていた2者が、⑥で出会い、⑦で一緒に移動して、また離れていくといったように、相手を固定化しない即時的な関係性が随所で作られていることがわかる。ここでは、モード4「流線となって繭が生まれ包まれる」の前半部であるさまざまな線の流れが表現の場全体に広がっていくかのような表現が続いていると考察される。

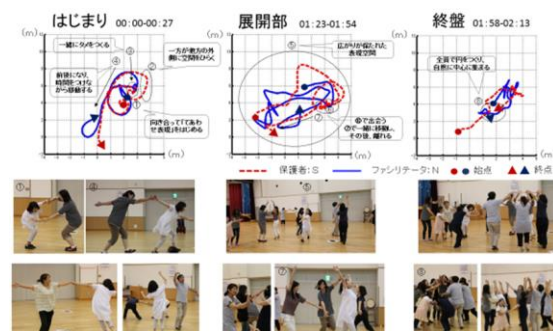


図3. 「花は咲く」にみるモードの移行

さらに「終盤」では、私たちがづくりあげた表現世界全体を、みんなで包み込むように円になり、最後に中心に集まって(図3の⑧)花の世界に包まれながらひとつの新しい花を咲かせるようにして表現を終えた。モード4の後半「繭が生まれ包まれる」かのような表現であると考察される。

このように、実践場面での参加者の表現の変容を、心身の共振の深化を示すモードの移行の視点から検討することで、身体での共創表現の活動に際しては、特にファシリテータのはたらきが極めて重要になることが見出された。ここでのファシリテータとは、WS全体を主導的な立場で牽引する従来型ではなく、表現の場にはたらきかけ、参加者が相互に表現をファシリテートし合う関係性を築くように、個々の心身のはたらきの活性化を促す者である。こうした事例検討と実践の場を絶えず往還することで、活動モデル開発は現場から進み、同時に、新たな研究課題が得られたとまとめられる。

(3) 計測手法の検討とポータブル型計測装置の開発

誰もがいつでもどこでも使用できるようなポータブル型の一自由度の手合わせ表現

システムを実現するために、①装置を使用するための身体的な制約を少なくすること②設置環境を選ばない大きさにすること③装置が表現の妨げにならないこと④手合わせ表現の計測が可能であること⑤現場（同場所）での二人での手合わせ表現と遠隔地間での通信による手合わせ表現の両方が実現可能であること⑥安全で安心な装置であること、以上の方針を基に、小型の卓上型の装置を三輪らが設計した。本装置は、センサ部、力呈示部、計測制御部、通信部から構成されている（図5）。

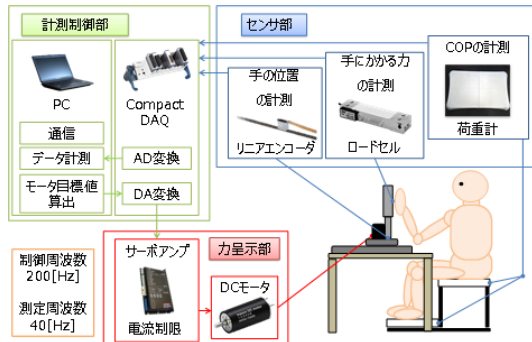


図5. システムの概要

(4) 「手合わせ表現」の計測と共振創出能の評価手法の開発

モード1から5への移行における表現の深化ダイナミクスを調べるために、三輪らが(3)で開発した前後方向一自由度の動きに限定した手合わせ表現計測システムを用いて、身体動作の計測を行った。その結果、共創表現においては、意識に上らないそれぞれの身体全体の動き（床反力中心の変化）が、双方で創りあう手のひらの動きに時間的に先行することや、手のひらの動きのリターンマップをとると、カオスアトラクタ的な構造が存在すること等が見出された（図6）。さらに、互いの力のやりとりを調べてみると、モード1レベルの表現では、押す側とそれを受ける側がはっきり分かれているのに対して、モード4レベルでは、それらを分けることができない結果が得られた（図7）。これは相手の力を支えつつ引くことによって、相手の思いが受けとめられると同時に、相手も同様にそれを受けつつ押ししているためと解釈される。このことは、共創表現では、する・されるという受動・能動的な自他の水平的関係から“私たち”の表現が生まれるのではなく、自他を分けることができない中動的な状態から、“私たち”が立ち上がってくることを示すものであると考察される。

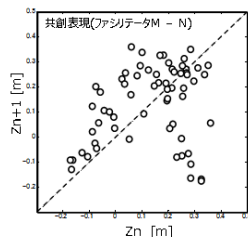


図6. 手合わせ表現におけるリターンマップ

さらに、本システムを用いて、WSに継続参加している発達障害の子どもたち10名とその保護者、職員が手合わせを実施した。その様子を図8に、また、その際に計測した手合わせ表現時の計測データの一例を図9に示す。

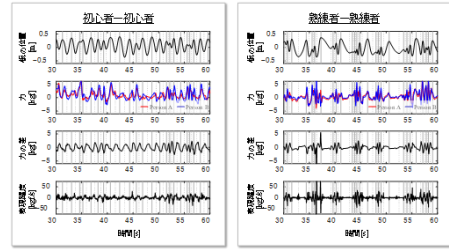


図7. モード1とモード4の表現結果



図8. システム体験の様子

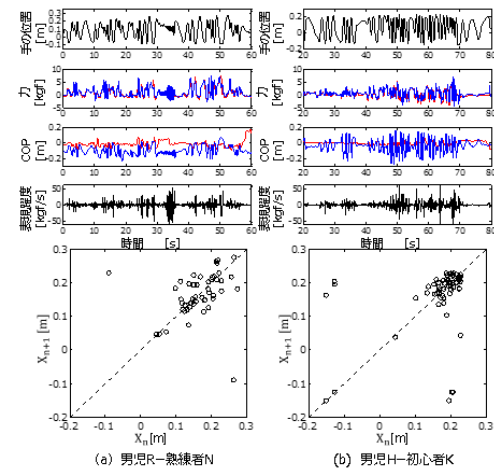


図9. 計測データの一例

(5) 「手合わせ表現」による心理・社会的変容についての検討手法の開発

前川と野口らが、WSに子どもと継続参加している母親と先生（支援者）に対するインタビュー調査を2回実施した。第1回インタビューは、11名を対象に、2014年3月～9月に行い、①手合せや身体表現の経験の積み重ねが、自分と他者（周囲）との関係をどのように変化したのか（させなかったのか）②手合せの表現そのものの変化をどのように認識しているか、それに伴い相手との距離の感じ方がどのように変化したのか（しないのか）に関する半構造化面接として実施した。調査対象者が語った言葉を、前川が修正型M-GTAによって分析し、その内的体験の過程を検討すると、WSによる身心での共振やずれの体験が、自己や他者への気づきを促し、生活の場も含めた関係性の変容が生じて、自己感の実感や交流の広がりへとつながることが導きだされ、WS参加者の共振の深化に伴う心理・社会的変容を捉える視点について

ての見通しを得ることができた。

第2回のインタビューは、2015年12月に、WSに継続参加し、ファシリテータを務めるようになった保護者4名に対して実施した。

第2回インタビュー調査の結果ならびに、両調査を比較検討することでの、本研究期間全体を通してのWS参加者の心理・社会的変容については、現在、得られたデータを基に、見出した視点からの分析・考察を進めている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 西洋子, 三輪敬之:被災地での共創表現-このフィールドは何を問いかけているのか- アートミーツケア, 査読有, 第7巻, P1-P18, 2016.3.
- ② Y. Miwa, S. Itai, T. Watanabe, H. Nishi: Generation Dynamics of Sympathetic Embodied Awareness in Hand Contact Improvisation, Proceedings of IASDR 2013 - 5th International Congress of International Association of Societies of Design Research, 査読有, pp.5558-5566, 2013.8

〔学会発表〕(計17件)

- ① 前川美行, 西洋子, 三輪敬之:身体表現活動が生み出す自己感の変容と交流の広がり-インタビュー分析から-, 日本ユング心理学会第4回大会, 2015.6.7, 京都文教大学.
- ② 三輪敬之, 原知也, 鈴木優太, 板井志郎, 西洋子:共創表現の創出ダイナミクスに関する研究~自己言及的な手合わせ表現システムの開発~, 2014.5.29, 沖縄産業支援センター.
- ③ 西洋子・三輪敬之:共創表現を育むファシリテータのはたらき, 日本体育学会第65回大会, 2014.8.27, 岩手大学.
- ④ 三輪敬之・西洋子:共創表現における場の創出について-一人手合わせ表現システムによる私との出会い, 日本体育学会第65回大会, 2014.8.27, 岩手大学.
- ⑤ 西洋子:東日本大震災の被災地における身体での共創表現-自閉症児と“許す”力-第18回日本アダプテッド体育・スポーツ学会, 2014.12.6, 神戸女学院大学.
- ⑥ 西洋子・三輪敬之:“あなた”を生み出す表現の力~身体的共創から社会的共創へ②~, 第65回舞踊学会大会, 2013.12.7, 愛知芸術文化センター.
- ⑦ 弓削田 綾乃・西洋子・野口 晴子・三輪敬之:身体表現を通じた被災地とのかかわりを考える~関東からの参加者に焦点をあてて~, 第65回舞踊学会大会, 2013.12.7, 愛知芸術文化センター.
- ⑧ 西洋子・三輪敬之:共振する身体と表現の風, アートミーツケア学会 2013 年度大会, 2013.11.17, 金沢美術工芸大学.
- ⑨ 西洋子・三輪敬之:身体的共創から社会的共創へ①~ことばが生まれるとき~, 日

本体育学会第64回大会, 2013.8.29, 立命館大学.

〔図書〕(計6件)

- ① 西洋子, 永浦典子, 三輪敬之, 「かもめの日」をめぐって-被災地域での共創的な身体表現の試み-, 東洋英和女学院大学死生学研究所編(リトン刊)死生学年報 2013 『生と死とその後』 pp215-230, 2013.3.
- ② 西洋子, 東洋英和女学院大学死生学研究所編(リトン刊)死生学年報 2015 『生と死とその後』 P181-P183, 2016.3.

〔その他〕

ホームページ

<http://www.teawasekaken.jp/index.html>

講演(計4件)

・西洋子:共創的な身体表現の場-月と水-, 日本箱庭療法学会第28回大会公開シンポジウム『場への信頼-共に在ること, 創ること-』, 2014.10.4, 東洋英和女学院大学.

6. 研究組織

(1)研究代表者

- ① 西洋子 (NISHI, Hiroko)
東洋英和女学院大学・人間科学部・教授
研究者番号: 40190863

(2)研究分担者

- ① 三輪 敬之 (MIWA, Yoshiyuki)
早稲田大学・理工学術院・教授
研究者番号: 10103615
- ② 野口 晴子 (NOGUCHI, Haruko)
早稲田大学政治経済学術院・教授
研究者番号: 90329318

(3)連携研究者

- ① 前川 美行 (MAEKAWA, Miyuki)
東洋英和女学院大学・人間科学部・准教授
研究者番号: 50512993
- ② 板井 志郎 (ITAI, Shirou)
早稲田大学・理工学術院・助教
研究者番号: 00398934
- ③ 弓削田 綾乃 (YUGETA, Ayano)
早稲田大学・スポーツ科学研究センター・
招聘研究員
研究者番号: 90432038
- ④ 秋田 有希湖 (AKITA, Yukiko)
鶴見大学短期大学部・短期大学部・講師
研究者番号: 90455030
- ⑤ 吉田 明子 (YOSHIDA, Akiko)
日本大学文理学部・助教
研究者番号: 10579121
- ⑥ 高橋 うらら (TAKAHASHI, Urara)
東京都市大学・人間科学部・講師
研究者番号: 00312835
- ⑦ 渡辺 貴文 (WATANABE, Tababumi)
早稲田大学・理工学術院・助手
研究者番号: 20449341